

山尾悠子

或は鏡の王国の記

仮面物語



山尾悠子

仮面物語

或は鏡の王国の記

徳間書店

■著者紹介■

昭和四十八年同志社大学文学部に入学。
「SFマガジン」の第三回SFコンテストに応募した『仮面舞踏会』が「SFマガジン昭和五十年十一月号」に発表される。同大学卒業の後、山陽放送テレビ制作美術部に勤務のかたわら、おもに「SFマガジン」誌に作品を発表。昭和五十三年、短篇集『夢の棲む街』を早川書房より上梓。その清冽なイマジネーションと硬質な文体は、新たな幻想文学の誕生として読者の注目を浴びるところとなった。昭和五十四年六月、山陽放送を退社して創作活動に専念。本書は書下し処女長篇である。SF作家クラブ会員。岡山市在住。

仮面物語

〈或は鏡の王国の記〉

1980年2月29日 第1刷

定価は帯・カバーに表示してあります

著者 山尾悠子

発行者 徳間康快

発行所 株式会社徳間書店

東京都港区新橋四の一〇
電話東京(43)六三二一番(代表)
電替東京四一四四三九二番

乱丁・折丁・本は本社またはお買求めの書店にてお取り替えいたします

編集担当 芦沢孝作

仮面物語へ或は鏡の王国の記

—— 目次

プロローグ——7

〔第一部〕 影盗みと鏡

第一章 彫刻師は粘土を買いにゆく——19

第二章 詩人の煩悶とその苦境——38

第三章 もう一人の証言者が登場する——56

第四章 影盗みは読書もする——69

第五章 鏡の仮面が二重館に氾濫する——83

第六章 ついに殺人事件も起きる——98

〔第二部〕 仮面の翳

第七章 自動人形が鍵を持つ——119

第八章 誰かがどこかで目醒める——133

第九章 柩の中身についての混乱が生じる——144

第十章 魔術師の弟子、或は預言者——152

第十一章 泥人形にも考えがあることが判る——167

第十二章 水上街炎上図——179

第十三章 その後の軌跡さまざま——197

第十四章 芸術家が悲鳴をあげるまでのいきさつ——216

第十五章 再び鏡の仮面が二重館に汜濫する——223

第十六章 旅のおわりとはじまり——242

エピローグ——263

解説に代えて——荒巻義雄——268

装幀 山岸義明

仮面物語

へ或は鏡の王国の記へ

鏡に向かうと、わたしの前には、黒ゆりの花冠を飾った暗緑色の頭巾をかぶり、銀色の仮面をつけた、幻のような人物が立っていた。(中略)頭巾を取ってみると、わたしは恐怖に口をあんぐり開けて、あっと叫んだ。銀羅紗の仮面の下には、なにもなかったのである。

ジャン・ロラン『仮面の孔』

プロローグ

尾を落として、滑るように進んでいく虎の後ろ姿が、視野の中央にある。

無人のどの部屋にも、空気の流れが感じられない。窓のない、密封されたような気配のある部屋、部屋の、重量感のある調度、火の気のない暖炉、柱、緞帳のたぐい——それらの存在すべてが、妙に色調の沈んだ空気の背後に息を潜め、表情をなくして見えた。ここに入ってきてからずっと、海拔の高い地帯に登ってきたような、気圧の変化による耳鳴りが持続している。時に、置時計のある部屋にさしかかると、埃っぽい秒針音がその耳鳴りに混じる。それがふと、ちりちりする幻聴に変化するような錯覚もあった。

……そんな気配の中を、黙ったまま、虎を前に行かせて歩いていく。

各部屋を連絡する扉は、すべてあけ放されている。奥へと進むには、ただそこを一直線に歩いていけばよかった。障害物は、何もない。途中、虎の平たい後ろ頭が、その無数の扉口のひとつを通り過ぎていった時、横手から、音もなく影のような人の姿が現われた。蠟燭消しの長い棒を手にした、お仕着せの使用人らしい人影は、声もなく尻を床に落とした。虎は、振り向きもせずそのまま進ん

でいく。その速度と同じ歩みで、後に続いて扉口を踏み渡っていくと、視野の片隅で、床にうずくまった使用人が、指の間から眼をこちらに向けるのが一瞬見えた。やがて次の扉口を通過した時、床を躰る（いざ）ように這って逃げだす気配が、背後に感じられた。

前方に、突き当たりの最後の部屋が見えてきた。あけ放された扉口のむこうには、目隠しの、透かし彫りのある衝立（つたせ）が置かれている。

衝立の前で、虎が初めて歩みを止めた。と同時に、跳ねるように脇に飛びのいて、その姿は視野の外側へと消えていった。先導の役目を終えた虎が視界からいなくなると、木製の衝立と、その向こうの部屋の天井が、障害物もなく一直線に見通せるようになった。

腕組みをしたまま、衝立を迂回して最後の部屋に入ると、真正面の高い壁の根方に置かれた寝台が眼に入った。その中に埋もれて、老人が眠っている。老人と呼ぶような年齢ではないのだったが——老人としか呼びようのない顔、五年間の空白期間を経て、見知らぬ変貌を遂げた顔が、そこにある。

視線をはずして、脇の壁を見た。とたんに、自分の上半身の鏡像が、視野に入った。生乾きの防水外套のフードを降ろして、腕組みをしている鏡像——銀の飾り縁（どち）のついた幅の広い鏡の前に、丈長の二本の蠟燭が立って、星のような焰を二重に増殖している。

飾り縁の最上部には、同じ銀の市の、紋章が浮き彫りにされていた。左右逆転した月球図——すなわち鏡に映した月球の像と、その周囲を丸く取り囲む、自らの尾（ポ）を呑む蛇（ス）。それがこの市の紋章、鏡市あるいは鏡都市と呼ばれる、この都市国家の象徴である。

腕組みしたまま、斜めに鏡を見つめて動かない自分の鏡像が、ふと腕をほだいて片手でフードを後ろに落とすのが見えた。首を振ると、丸めてあった髪が肩に重く雪崩^{なだ}れて、腰まで垂直に垂れ下がっていく。

その鏡の前に、一枚の写真がある。

急に飛びつくように、鏡に駆け寄ってそれを手に取ると、下に重ねて置かれてあった数枚の紙片が、眼に止まった。写真の人物の名と居場所、その他のあらゆる情報——求めていたものは、これに間違いなかった。すると物音がして、振り向くと、寝台の中の顔が眼を見開いていた。

「聖夜」

と、この立憲君主制都市国家の、世襲制当主である老人は、娘の名を呼んだ。

……ひえびえとした寂しさに襲われて、ふと眼ざめると、老人はそこに虎を見たのだった。視野の外側から射しこんでくる光は午後の気配で、部屋の中には、何の物音もない。透かし彫りの衝立の、その格子越しに、つと動いて消えた虎の姿は、こころの隙をよぎった幻影か、眼の錯覚かとも思われた。すると、白昼の音のない幻覚がまだ続いているように、聖夜の姿がそこに現われるのが、見えたのである。

肩先のうすら寒さを感じながら、最初、加賀見は——それが彼の名だった——それ以上眼を開く気にはなれなかった。臉の隙間から見えている聖夜の幻影は、小さく動いて鏡を眺めているようだった。毛深い毛布に埋もれて、うつうつと半睡していると、執念深く両足の芯を咬む古傷の痛みが

甦ってくる。するとその幻は、鏡の前に置かれてあった写真を手にとった。

この五年間、加賀見はその写真の人物が出現することだけを恐れ続け、そして、万一その出現があった場合、聖夜を彼に逢わせないことばかりを考え続けてきたのだった——第一、幽閉に近い状態にある筈の聖夜が、どうやってそこを抜けだしてここまで来ることができるといふのか。これは幻なのだ、午睡の夢の続きなのだ。そう思いながら加賀見は起きあがり、相手の名を呼んだ。

「——下界は今日は、霧がひどい」

壁を背にして、部屋の気配が凝って生じたもののように見えるその姿は、聖夜の声でそう言った。「霧の中を来たのか。誰かに顔を見られなかったか」

広い部屋の端と端に隔たったまま、聖夜の姿が小さく動いて、否定の身振りをするのを加賀見は見た。

「この塔に登ってきてから、ここの使用人だけに」

「何故、おまえが入ってくるのを止めなかったのだろう。誰であろうと、下界の人間は登ってこさせないよう、言いつけてあるのだが」

「あたしを止めさせたりは、しない」

聖夜は、片手に持った写真の角を、軽く顎にあてた。「これが新しく現われた、その人物——？」
「何故、今日ここに来た。写真は、今朝届いたというのに、符丁が合います」

「ゲットオから、あたしに知らせてきた——それが市に出現したことで、その写真を今日ここに送ったということ」

「どういふつもりで、おまえにまで知らせたり——」

言いかけて身じろぎすると、押し潰された両足を、鋭い痛みが走りぬけた。加賀見は、壁の呼び鈴の紐を引いた。

「おまえが今、ここに現われたりする筈はないのだ。人を呼べば、私が、今ここに見ているのは私の幻なのだ、と教えてくれるだろう——おまえは、ここに現われなどしなかったし、その写真に手を触れなどしなかったと」

「呼んでも、誰も来はしない」

「すぐに人が来る。それから館のほうにも連絡して、監視を厳しくするよう命令しておく。私が今日見た幻のことを話して、その幻が現実になるようなことが、決してないようにと、命令しておく。万一、おまえがあそこを抜けだしたりして、外で人に見られたり、事故に会ったりしては困るからな」

「呼んでも、来はしないと言うのに」

苛立たしく鳴り響く鈴の音の中で、加賀見は横手の壁鏡に捉えられていた聖夜の横顔が、ふと後退して消えるのを見た。写真と紙片を握ったまま、壁沿いに後退していく聖夜の背後に、虎がいる。幻では、なかった。淡い影を背後に曳いて立つ、体長三メートル近い牡の成獣。——室内の空気中に、突然、見えない静電気の火花が暗く充満しはじめる錯覚を、加賀見は持った。

「誰も来はしない、虎を恐れているし——たぶんあたしをも」

「それは何だ」

彼は敷布に指を立てた。「いつ飼いだめた、何のつもりで」

「あたしはもう行く」

「莫迦な」

車椅子に手を伸ばそうとして、彼の軀は、半ば床にずり落ちた。

「へ帝王」

と、聖夜が都市国家当主の呼称を使って呼ぶ声が、その耳に入った。

「この写真を送り届けてきた時、ゲットオの予言者は、一緒に予言をも伝えてきた筈——あたしが今日ここに来て、これを手に入れることになっていると。彼は、あたしにも伝えてきた。予言には、逆らえない」

「しかし、逆らわねばならんのだ」

腕だけの力で、加賀見は車椅子に這いあがろうとしていた。その両足は、五年前灼熱した鉄塊に押し潰されて以来、二度と元には戻らなかったのである。

眼もやらないで、聖夜が片腕だけを動かして、虎の側頭部を軽く打つのが見えた。虎は、踵を返して、衝立の裏へと軽く飛んで消えた。

「待て。私が、何故、地上を捨ててここに隠栖しなくてはならなかったのか、それが判らないのか」

「それでも、あたしは行く」

「駄目だ、行くな」

加賀見が最後にその名を呼んだ時、聖夜の顔は、そのまま後退してふと消えていた。跳躍する虎の尾がそれに続き、防水外套の裾が衝立の影に翻ったかと思うと、すべての気配は消えた。

——まだ反動で揺れ動いていた呼び鈴の紐の揺れが、しだいに治まっていき、最後にかすかな余韻を残して、音はとだえた。風もないのに——鏡の前で、二本の蠟燭の焰がふと一直線に中空に伸びあがるなり、細くとぎれた。薄い白煙が、そこに残った。

加賀見は、物音の死に絶えた室内の光景を見渡した。すべては、眼ざめる前と何の変わりもない。ただ、壁鏡の鏡像の変化が、白昼の幻の通過の跡を示しているだけである。

鏡に宿っていた蠟燭の丸い焰がなく、そして、同じくそこに映っていた紙片がない。

……かなりの時間がたって、恐る恐る衝立の影に顔を並べた数人の使用人は、〈帝王〉がひとり、車椅子に背を埋めて物思いに沈んでいる光景を見た。虎も、防水外套の女客も、そこにはもういない。

いつまで待ち続けても、〈帝王〉は、眠っているように動きたそうとしなかった。

扉の左右に折り畳まれていた鉄のシャッターが中央で閉じると、都市中^{まち}にただ一基しかないと言われる塔の昇降機は、昇りの時と同じく、静かに軋んで動き始めた。

垂直に下降していく箱の中で、虎は緑の眼を半眼にして、待機の姿勢をとったまま、身じろぎもしない。必要以上に緩慢な動きで降りていくためか、箱の中を流れる時間^{とき}は、地上のそれよりも、少しばかり稀薄に長く引き伸ばされているように感じられる。——

塔の全長の半ばを過ぎたところから、箱の中に変化が起き始めた。

最初に、空気の感触が目立って重くなっていた。鉄のシャッター越しに、ゆっくりとせり上がっていく堅穴の荒い石壁——それが、箱の天井の薄暗い灯を受けて、時おりびっしりと燦いて見える。壁の表面に、水滴が数知れず噴きだして、鉋脈のようににぶく輝いているのだった。

次に、急激な気温の上昇が始まった。天井の吊り洋燈の光は、暈を負って乳白に潤みはじめている。剣き出しの床に腹をつけた虎も、奥の壁に背を凭せかけて腕を組んだままの聖夜も、それでも身動きしようもしない。塔の頂上にいた間に乾き始めていた防水外套は、再び重みを増し、細かい水蒸気の粒に覆われていきつつあった。

最後に、少し浮きあがるような反動があって箱が停止し、二重扉が左右に開いた。

まず、虎が出ていった。

二十メートルほど前方の、煤けた洋燈を吊るした石壁の真正面に、扉がある。一直線にそこへ向かっていった虎が、肩の力でそれを押しあけると、とたんに、靄あかりが薄暗いこの空間に洩れこんできた。と同時に、眼にはつきり見えるほどの動きで、濃い乳白色の霧が重く雪崩れこんでくる。なま暖い舌のような動きで、床になだれ落ちた霧は、そこで一旦動きをゆるめた。それから、滑るように床一面を這いひろがっていく。虎はその揺れ動く波を踏んで、頭から霧の中心へと没していった。真珠母色に輝く光の膜の中に、一瞬淡い影絵が残り、最後に尾の先端が蛇のようにくねった。それも、すぐに消えた。

後には、何の物音もない。